



国際人材

農学国際協力系学生団体の持続的な運営に向けた課題と人的資源管理

Challenges in human resource management for sustaining the activities of a student association in international cooperation for agricultural development

柴野 一真¹⁾・糟谷 亮太¹⁾・千葉 肇¹⁾・松島 瑞穂¹⁾・齋藤 輝¹⁾・国松 恭平¹⁾・
嶋 亮希¹⁾・長谷川英夫²⁾・ウイタカ アンドリュウ²⁾

Kazuma Shibono¹⁾, Ryouta Kasuya¹⁾, Hajime Chiba¹⁾, Mizuho Matsushima¹⁾, Akira Saitou¹⁾,
Kyohei Kunimatsu¹⁾, Takaki Shima¹⁾, Hideo Hasegawa²⁾, Andrew Whitaker²⁾

1) 新潟大学農学部

2) 新潟大学自然科学系

1) Faculty of Agriculture, Niigata University

2) Institute of Science and Technology, Niigata University

論文受付 2020 年 1 月 6 日 掲載決定 2020 年 1 月 16 日

要旨

本稿では、2019年9月に開催した国際学生フォーラムで浮上した新潟大学農学部公認グローバル人材育成サークル BRIDGEの持続的な運営に向けた課題と対応方法を(1)民間助成金、(2)人的資源管理、(3)国際協力に係る政府関係機関との連携という視点から述べた。民間助成金では、不採択に至る過程を分析し効果的な申請書作成に言及した。人的資源管理では、リーダーシップならびにスキルという視点から体制づくりを述べた。国際協力に係る政府関係機関との連携では、JICA研修生向けの英語教育コンテンツを本邦大学の学部生・大学院生が活用すること、教育コンテンツの拡充と更新の方策、JICA研修生と日本人学生の協同について提案した。BRIDGEはこうしたノウハウを全国の農学系学部生と共有し、私たちの反省を踏まえて円滑に運営される農学国際協力系学生団体が全国に立ち上がり、未来の農学国際協力人材の礎となる学生版JISNASの構築に向けた契機となることを期待している。

キーワード：農学国際協力人材、持続可能性、助成金、人的資源管理、学生版 JISNAS

Abstract. This article describes possible solutions to the challenges of (1) obtaining private grants, (2) human resource management, and (3) cooperation with government-affiliated agencies, which arose at an international student forum held by BRIDGE in September 2019. BRIDGE is a circle for global-minded students, which is recognized officially by the Faculty of Agriculture, Niigata University. We describe reasons why applications for private grants were rejected, and make suggestions for the preparation of more effective applications. Concerning human resource management, we suggest organizational structure of BRIDGE from a point of view of leadership and management skills. In regard to cooperation with government-affiliated agencies, we suggest Japanese university students and graduate students use English educational content for trainees belonging to JICA, and plan for the expansion and renovation of educational contents with collaboration between JICA trainees and Japanese students. By sharing knowledge and experiences with other Japanese agricultural students, we hope that student organizations related to agricultural international cooperation can be founded throughout Japan. This could be an opportunity to build a student version of JISNAS (Japan Intellectual Support Network in Agricultural Sciences) as a foundation for future resources in agricultural international cooperation.

Key words: Resources in agricultural international cooperation, Sustainability, Grant application, Human resource management, JISNAS Student Organization

1. はじめに

BRIDGEは、2010年7月にプトラ大学（マレーシア）で開催された世界農学学生会議(2nd IASS)と2011年3月に行われた新潟大学組織的教育プロジェクト（新潟大学GP）に参加した農学部生によって2011年4月に結成された¹⁾。2016年からBRIDGEは国際学生フォーラム（AUF：Agricultural yoUth Forum）を学生主体で開催するために、民間助成金の獲得、企画・運営に従事してきた。BRIDGEはAUFを通じて、(1)異文化コミュニケーション能力の向上、(2)国際的な相互理解、(3)専門知識の共有、(4)人的・知的ネットワークの構築を活動理念として、その深化と更新を図ってきた²⁾。

前稿²⁾では、過去3回にわたり開催したAUFの開催マニュアルを共有することで、全国の農学部生らが地域の特色のある国際学生フォーラムを開催し、農学国際協力人材の育成に向けた学生版JISNASを組織する契機となることを期待した。本稿は、2019年9月に開催した第3回AUFから、(1)農学国際協力に係る学生団体の持続的な活動の在り方、(2)BRIDGEにおける人的資源管理（リーダーシップ、スキル）の視点から浮上した課題と対処方法を共有することで、全国の大学で今後取組みが期待される同様な学生組織の実質化に向けた障壁を取り除くことを目的としている。

2. 国際学生フォーラムAUF

1) 趣旨

AUFとは、世界に日本の農業を発信し、同時に海外の農業を知ることで「農業分野の国際交流」を目的とした国際学生フォーラムである。主にアジアを中心とした海外の農学部生を新潟に招いて開催してきた。第3回の主題は、「持続可能なフードシステム～Stories on one plate～」であった。BRIDGEは食の持続可能性について各自専門分野を中心に学習を進めるとともに、参加国には食に関して日本とは異なる課題が存在することを踏まえ、私たち学生がこうした食料問題のステークホルダーであることを相互に理解し、持続可能なフードシステムの構築に向けて行動できることを目標とした。

2) 開催内容

開催内容を表1に示した。期間は2019年9月17日から9月23日であり、参加者は後述する助成金の制約から沿海地方国立農業アカデミー（ロシア）2名、国立台湾大学（台湾）1名、パンヤピワット経営大学（PIM:

Panyapiwat Institute of Management, 以下PIMと略記）1名であった。国立台湾大学の1名は、ルーヴァン大学（ベルギー）に本部を置くIAAS(International Association of Students in Agricultural and Related Sciences)を介した応募者であった。BRIDGEはIAASの日本支部を務めている。

(1) 1日目

9月17日、ロシアから2名の学生、台湾から1名の学生、タイから1名の教員が新潟大学に到着した。海外からの参加者は移動による疲労と緊張で当初硬い面持ちであったが、アイスブレイクとしてWelcome partyを開催した。ここでは日本の料理を紹介し、食事とともにしたことで参加者の緊張も和らぎ、交流を楽しむことができた。

(2) 2日目

9月18日、海外の学生による各国文化と経済事情を背景とした食料問題に関する発表の後、質疑応答を通じて各国の現状について理解を深めた。ロシアの学生は、「ロシアの持続的なフードシステムの形成」、台湾の学生は「台湾の農業事情」、タイの教員は「PIMと研究内容」、日本の学生は「食に関する国際協力活動」ならびに「日本の食の特色」を紹介し、活発な質疑応答を行った。

特にロシアの発表は、日本海側に位置する新潟大学の学生として、対岸に位置するロシア極東の農業の未来に初めて触れ、日本と同様な問題を抱えていることを実感し、相互に補完可能な農業の発展について考える契機となった。

農学部長の表敬訪問を終えた後、文化交流を目的としたカルチュラルナイトを行なった。日本の料理やいがた総おどり、日本の伝統的な遊び、文化を体験できるような企画した（図1）。海外参加者は自国のお菓子を持ち寄っており、各国の食文化や嗜好について学ぶ機会を得た。

表1 プログラム概要

日程	プログラム内容
9月17日	来日、Welcome party
9月18日	カンファレンス カルチュラルナイト 表敬訪問
9月19日	フィールドトリップ1 NPO法人「赤とんぼ」、(株)新生バイオ
9月20日	フィールドトリップ2 粋男会、JETRO新潟
9月21日	ワークショップ
9月22日	関川村観光、Farewell party
9月23日	帰国

(3) 3日目

9月19日、「持続可能性」をキーワードとして、生産・加工ならびに経済活動の各分野でユニークな活動に取り組む地場企業を訪問するフィールドトリップ1に向かった。

1日目は生産分野としてNPO法人「赤とんぼ」、食品加工分野として(株)新生バイオを訪問した。NPO法人「赤とんぼ」は有機農業を推進して、有機栽培農家と消費者を結ぶ団体である。動植物や自然環境との共生関係を大切に、地球と人間に優しい有機農業を広め、環境保全に寄与することを活動目標としている。同法人は日本農林規格登録認証機関の認可を得て、有機農産物の認証機関としても機能している。ここでは有機農法の効果やメリットについて学んだ。(株)新生バイオは、規格外として廃棄される農作物を粉末やペースト状に加工することで乾燥チップス、乾燥パウダー、ペーストを製造し販売する企業である。フードロスを解決する加工技術はSDGsの観点から重要である。ここではセラミックを使った食品乾燥、水質維持について学んだ。

(4) 4日目

9月20日、フィールドトリップ2日目は生産分野として粋男会、経済活動分野としてJETRO新潟を訪問した。粋男会はグローバルGAP団体認証を取得しているグループである。ここでは日本のグローバルGAPの仕組みや現状を伺った。海外参加者は自国のGAPに関する現状と対比しながら日本のGAPについて学ぶことができた。ここでは、(1)目先の利益の追求が顕著であること、(2)GAPや有機農業に対する漠然とした認識、(3)GAPに対する誤った認識が日本での認知の障壁であることを知り、多くの要素が関係した深刻な問題であることを痛感した。

JETRO新潟は地場産品の輸出を通じた産業振興に取り組んでいる。企業の海外展開支援のために商談会を開催することを業務の一つとしており、国際的な視野を持ちながら地域でも活躍できる人材が活躍する場として有意義であった。

(5) 5日目

9月21日、関川村観光では酒造業・廻船業から始まり、大名貸しや新田開発で財を成した豪商・豪農である渡邊邸を見学した。伝統的な家屋の構造、国指定名勝の庭園、土蔵などから関川村の伝統、歴史について学んだ。昼食には、雑穀栽培に取り組む生産者が集まった「つぶつぶ栽培者ネット」のメンバーである「おおしま農縁」を訪問し、雑穀を使った料理を堪能した。関川村の観光資産である「えちごせきかわ大したもん蛇まつり」の起源や慣習についても学んだ。村民がそれぞれの集落で竹と藁を使い大蛇を作る。大蛇の作り方を習い、制作を体験することができた(図2)。関川村観光は、農家の手伝い、農家との親睦を深めることを目的とした学生サークルにも所属するBRIDGE構成員が築いた人的ネットワークが契機となり実現した。

(6) AUF総括

今回のAUFでは、BRIDGEが目標とする「農学の専門性を高める」という点で有意義なフォーラムであった。参加国のフードシステムをカンファレンスで共有し、フィールドトリップで現場に赴き知見を広げたのち、ワークショップでフードシステムの現状と課題について議論を深めることができた。海外の学生と交流することで参加国から見た日本のフードシステム、参加国のフードシステムを学び、多角的な視点に立つことで見えてくる問題点や解決策があることを体感できた。



図1 カルチュラナイトで書道体験
(左：ロシア学生, 右：タイ教員)



図2 竹と藁で大蛇の制作体験

第3回AUFを通じて、BRIDGEに内在するいくつかの課題が顕在化した。それらは英語運用能力、フォーラム運営である。後者については次章で詳述する。AUFでは日常生活に比べて英語を使う機会が多く、食事の会話、フィールドトリップ視察先から受けた説明を海外学生らに迅速に英語で説明することが難しかった。英語運用能力の底上げはBRIDGE設立以来の課題である。その解決には多くの時間と労力を要するが、その意識を共有してモチベーションを維持することで語学力の向上に励む仕組みづくりに励みたいと考えている。

3. 農学国際協力系学生団体の持続的な運営に向けた課題とその対応策

BRIDGEの活動の柱であるAUFを開催する過程で持続的な運営という視点からさまざまな課題が浮き彫りになった。その課題と対応策を以下に整理した。

1) 民間助成金

農学国際協力系学生団体を持続的に運営するにあたり、特に国際学生フォーラムを開催する場合、運営資金が必要となる。従来BRIDGEはAUF開催に際して、財源の大半を民間助成団体から獲得する助成金に依存していた。第3回AUFでは、複数の助成金申請が不採択となったことから、収入は海外参加者から徴収した参加費と1件の助成金のみとなり運営面で支障をきたした。

不採択の原因としては、当該団体にとってBRIDGEの過去の実績が十分に伝わらなかったことが考えられる。前年度の助成金申請担当者および先輩らの経験知を十分に継承できなかったことも指摘できる。こうした事態を繰り返さない方策として、AUF後に(1) 構成員による振り返りレポート作成、(2) 海外参加者と視察先からのフィードバックを活動報告書として取りまとめ、引き継ぎ資料とした。

民間助成金を想定した資金獲得は不安定であり、代替案の検討とともに民間助成団体の選定を早期に進め、申請書に着手することが望ましい。同一団体に継続して助成金を申請する場合は、申請が再び受理される可能性は前年度よりも小さくなることを想定すべきである。

2) 人的資源管理

(1) リーダーシップ

設立時4名であったBRIDGEは、2019年度に約60人

の構成員を抱えるに至った。そのためリーダーには、幹部層から新入生までを動かすリーダーシップ、農学国際協力活動に対する意欲の強さに応じてタスクを配分するバランス感覚が要求された。トラブルの解決方法を冷静に分析し、その解決に向けたタスクを同期や後輩に振り分けることが難しく、一人で抱えてしまう傾向が見られた。BRIDGEの活動を積み重ねることで得られる経験知を後輩へ余すところなく引き継ぐ手段が未熟であり、世代交代の度に振り出しに戻る場面もあった。

リーダーの視点から振り返れば、同期や後輩といった「フォロワー」が自律的に行動できる環境づくり、意欲のある人材を学年に関係なくサブリーダーに登用するなど、組織の流動性とともによりがいと責任を自覚できる体制の構築が必要であった。さらに、年間の活動計画を組織全体で共有し、目標達成に向けて計画的に活動できる組織が求められる。

(2) スキル

BRIDGEの主な資金源は民間助成金であり、採択される申請書を作成するには一段と高い文章力が要求される。具体的には、(1) 活動実績を十分にアピールしているか、(2) その実績を踏まえて、より発展させる魅力的な提案であるか、(3) 独創的な活動であるか、(4) 活動の社会的意義は十分に伝わるか、などについて論理的な文章の組み立てが求められる。アカデミックライティングやスタディスキルズと称される大学初年次教育向け講義あるいは演習科目を活用して、文章力を陶冶する仕組みづくりが期待される。魅力的なコンテンツを生み出す創造力やそのコンテンツの魅力を余すところなく伝えるプレゼンテーション能力も必要である。

3) 国際協力に係る政府関係機関との連携

BRIDGE顧問として約10年間、農学の視座から国際的な視野を持ちながら地域でも活躍できる人材を育むことに従事した経験と反省を踏まえ、大学と国際協力に係る政府系関係機関が協同して農学国際協力人材の育成にあたる方策を以下のように提案したい。

(1) 研修生向け教育コンテンツの利用

JICAが開発途上国の研修生向けに蓄積してきた教育コンテンツは、農学を志す学部生や大学院生にとって専門性にも配慮した質の高い英語コンテンツである。これらを各大学で利用できる仕組みが欲しい。例えば、JICA本部に設置したサーバーから教育コンテンツをオープンコースウェアとして配信し、各大学附属図書館マルチメディア室での利用あるいは講義での利活用を促

進する。

(2) 教育コンテンツの拡充と更新

JICA 開発大学院連携において、農学分野でも基幹となる国内大学・大学院で授業科目の開発が進められている。研修内容の多様化に伴うコンテンツの拡充や更新を目的として、大学生の視点を取り入れた教育コンテンツに関するコンペ開催を提案したい。地域の特色を活かしたコンテンツが拡充していけば、日本人学生と研修生の双方にとって日本の農業を俯瞰する機会となる。

(3) JICA 長期研修生と日本人学生との協同

JICA 長期研修生と日本人学生が地場企業の特徴を取り入れたコンテンツ作りで共同することを提案したい。開発途上国の農業農村開発と市場へのアクセスを包括的に理解する教材に仕上げる過程で未来の農学国際協力人材の育成につながることを期待される。企業側の視点を取り入れることができれば、地域の特色を生かした本邦中小企業の海外展開支援の契機ともなる。

4. 総括

本稿では第3回 AUF を振り返り、その過程で明らかになった運営上の課題を考察することで BRIDGE の今後の活動の在り方を述べた。この考察を全国の農学系学部・大学院で学ぶ学生らと共有することで、BRIDGE の反省を踏まえた円滑な運営がなされる学生団体が全国に立ち上がり、学生版 JISNAS の結成に向けた契機となることを期待している。BRIDGE はそのフロンティアとして国際協力に係る関係機関と連携して、未来の農学国際協力人材の育成に貢献していきたい。

謝辞

第3回 AUF を開催するにあたり視察を快く受け入れて下さった NPO 法人「赤とんぼ」、株式会社新生バイオ、粋男会、ジェトロ新潟、おおしま農縁、その他多くの方にお世話になりました。ご協力をいただいたすべての方々にここに記してお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 山田将慶, 白石景子, 櫻井盛太郎, 長谷川英夫, ウィタカ アンドリュウ 『学生が主体となった新潟発の国際プログラムはどのように成功したのか』 農学国際協力, 16, 65-74, 2018
- 2) 嶋 堯希, 鈴木真由, 国松恭平, 長谷川英夫, ウィタカ アンドリュウ 『学生版 JISNAS の組織化に向けた農学部生のための国際学生フォーラムの開催マニュアル』 農学国際協力, 17, 41-47, 2019
- 3) IAAS 本 部 <https://www.iaasworld.org/network/> accessed in 29 December 2019.
- 4) NPO 法人「赤とんぼ」 <http://www.akatonbo.or.jp/> accessed in 29 December 2019.
- 5) 株式会社新生バイオ 『クリーンセラミカ・インデックス』 http://www.shinsei-bio.com/old/clean_ceramica/index.html accessed in 29 December 2019.
- 6) 株式会社エヌ・オー・エス 『新潟県新潟市【いけめん米®プロジェクト】』 <http://www.nos-1st.co.jp/ikemen/about.html> accessed in 29 December 2019.
- 7) ジェトロ (日本貿易振興機構) 『ジェトロ ジェトロの取り組み』 <https://www.jetro.go.jp/jetro/activities/> accessed in 29 December 2019.
- 8) 新潟県関川村役場 - 岩船郡『渡邊邸 (国指定重要文化財)』 <http://www.vill.sekikawa.niigata.jp/tourism/155/156/index.html> accessed in 29 December 2019.
- 9) チームつぶつぶ 『つぶつぶ』 <https://tsubutsu.jp/community-team/> accessed in 29 December 2019.
- 10) 新潟県関川村役場 『えちごせきかわ大したもん蛇まつり』 <http://www.vill.sekikawa.niigata.jp/tourism/209/index.html> accessed in 29 December 2019.